

中国・新疆ウイグル自治区における文字と印刷・出版文化の歴史と現状

ーウイグル語の事例を中心にー

菅 原 純

jun_sugawara@nifty.com

目 次

1. はじめに.....	2
1.1. 「多文字」文化圏としての新疆.....	2
1.2. 現地調査の内容.....	2
1.3. 現地調査の日程.....	3
2. ウイグル文字文化の 20 世紀.....	4
2.1. 伝統的文字文化.....	4
コラム(1)バシュ・カガズ・コチャ訪問ーホタンの伝統的製紙業瞥見ー.....	6
2.2. 「解放」以前の印刷・出版文化(1901-1949).....	8
2.3. 「解放」後の印刷・出版文化(1949-1980s).....	11
コラム(2)ホタン市文明印刷廠訪問ーやっと見つけた鉛活字印刷所ー.....	16
3. ウイグル文字文化の現状ーデジタル化へ向けてー.....	17
3.1. 行政の取り組みー民族語言文字工作委员会の仕事ー.....	17
3.2. ウイグル語出版・印刷事業の現状と課題.....	20
コラム(3)新疆での日本語教科書出版ー新疆石油学院印刷廠訪問ー.....	23
3.3. ウイグル語とコンピュータ.....	25
コラム(4)紅旗路電腦商場訪問記.....	31
4 おわりに.....	32
註.....	33

1. はじめに

1.1. 「多文字」文化圏としての新疆

中国・新疆ウイグル自治区（東トルキスタン）は中華人民共和国の西北角に位置する中国最大の省区である。漢字文化圏の中心とも言うべき中国の一部ながら、当地域はアラビア系文字を使用するウイグル、カザフ、キルギス、モンゴル文字を使用するモンゴル、そして満洲文字を使用するシボ、マンジュ（満洲）など、漢字とは別の文字を使用する民族集団を多数抱えている。「多文字」文化圏であることは当地域を特徴付ける一大要素である。

今日、中国は漢語(中国語～普通話)を公用語としているが、当地域では漢語と並んでさらにウイグル語が地区全域の公用語として公式に使用されており、自治区より更に下のレベルの民族自治行政単位（民族自治州、県、郷など）では漢語・ウイグル語に加えて各地域の主要民族の言語が公用語として公式に使用されている。こうした事情を反映して、当地域の文字文化および印刷・出版文化は他地域には見られない多様性を有するにいたり、デジタル化に代表される将来の方向性もその多様性を踏まえることが不可欠である。さらに「多文字」文化圏としての新疆の状況を詳しく把握することは、他のアジア地域における事例を考察する上でも一定の意義を有していると考えられる。

本稿では、漢語と並んで当地域の公用語であるウイグル語¹に焦点を当て、前半で当地域における文字と印刷・出版文化の歴史背景を概観し、ついで実地調査の成果として今日の諸状況を提示し、本「文字印刷科研」研究プロジェクトの趣旨に沿って、今後のデジタル化の基礎となる問題点と将来の展望とを提示してみたい。

1.2. 現地調査の内容

新疆での調査は主として以下の諸項目について行なった。

（１）ウイグル文字文化史に関わる実地調査と資料収集： 過去の文字文化の「痕跡」を訪ねるとともに関連資料の収集を行った。具体的には印刷技術導入以前の「写本時代」によく用いられていたホタン紙の現在の製紙工程を実見し聴き取り調査を行なうとともに、今世紀初頭から 1930 年代まで稼動していたカシュガルのスウェーデン伝道団の印刷所跡地を訪問した。また現在の零細素朴な印刷技術を用いて作られた民間出版物等を収集するとともに、10 年程前まで広く用いられていたウイグル語活字のサンプルを購入した。

（２）政府機関による文字管理行政の実態に関する基本調査： 少数民族の言語として、ウイグル語をはじめとするアラビア系文字が政府レベルでどのように扱われているかを調査した。具体的には新疆ウイグル自治区には同自治区の言語・文字管理を担当する行政機関「民族語言文字工作委员会(略称「民語委」 *Shinjang Uyghur 'Aptonom Rayynluq Millätlär Til-Yeziq Khizmät Komiteti*)」を訪問し、インタビューを行うとともに関連資料・文献を収集した。

(3) 出版・印刷業界の現状調査： 本研究プロジェクトに直接関わる調査。まず新疆における出版事業の現状把握のために現地最大手の出版社である新疆人民出版社(*Shinjang Khälq Näshriyati*)のウイグル語セクション(維文編輯部 *Uyghur Tährir Bölümü*)を訪問し、ウイグル語を中心とするアラビア系少数民族文字出版物の出版状況(現状)を、今回は特に具体的にどのような工程で、いかなる機器(コンピュータ等)を用い、またいかなるソフトウェアを利用して行われているのか、という技術的な面から調査を行った。印刷事情については現地最大手の新疆新華印刷廠(*Shinjang Shinkhua Basma Zawuti*)および新疆石油学院印刷廠(*Shinjang nefit shü'äyuän basma zawuti*)を訪問し、簡単なインタビューを行なった。

(4) ウイグル語におけるコンピュータ事情調査： 今日、新疆、特にウイグル人社会ではどのようにコンピュータをいっているのか、主としてどのようなウイグル語フォントを用いているか、という点に留意しウルムチ市のコンピュータ店街(紅旗路電腦商場)で簡単なインタビューを行なうとともに、ソフトウェア、フォントを購入した。また現代ウイグル語版のLinux開発に取り組んでいる新疆工学院・機械工程系実験と計算力学研究所(ECMRC)を訪問した。

1.3. 現地調査の日程

実地調査は次に示す期間に2度にわたって行われた。夏の調査はかねて私が研究を行っていたホタン地区(*Khotän Wilayiti*)の口承伝説調査のため、同地区での一定時間の実地調査を含んでいる。秋に行なったものは夏の調査の補足調査であり、夏に発注しておいた鉛活字の購入、関連機関の再調査を実施した。

本調査（2000 年 8 月 16 日～9 月 16 日）	9 月 5 日	バシュ・カガズ・コチャ、バグチ・バザール	
8 月 16 日	移動日：東京ー北京ー烏魯木斉	9 月 6 日	和田市白玉歌舞団
8 月 17 日	ミールスルタン・オスマノウ教授宅	9 月 7 日	カラ・カシュ、ホタン市文明印刷廠
8 月 18 日	新疆石油学院印刷廠	9 月 8 日	チラ、イマーム・ジャーファル・タイラーン廟
8 月 19 日	新華書店、二道橋バザール	9 月 9 日	移動日：ホタンー烏魯木斉（空路）
8 月 20 日	新疆博物館	9 月 10 日	休養日
8 月 21 日	休養日	9 月 11 日	新疆大学図書館
8 月 22 日	紅旗路電腦商場（アルマス・ソフト）	9 月 12 日	地方志編纂委員会、民語委、古籍弁公室
8 月 23 日	紅旗路電腦商場インターネットカフェ	9 月 13 日	新疆大学、民語委
8 月 24 日	町の看板調査、新華書店	9 月 14 日	民族古籍弁公室
8 月 25 日	紅旗路電腦商場（ブグラ・コンピュータ）	9 月 15 日	移動日：烏魯木斉ー北京
8 月 26 日	新疆人民出版社	9 月 16 日	移動日：北京ー東京
8 月 27 日	休養日		
8 月 28 日	二道橋バザール地区再開発実地調査	補足調査（2000 年 11 月 1 日～6 日）	
8 月 29 日	移動日：烏魯木斉ーカシュガル（空路）	11 月 1 日	移動日：東京ー北京ー烏魯木斉
8 月 30 日	カシュガル市散策。カシュガル市博物館。	11 月 2 日	民語委、新疆工学院 ECMRC
8 月 31 日	カシュガル市散策。カシュガル旧市街民居	11 月 3 日	民語委、人民出版社、新華印刷廠
9 月 1 日	チニ・バグ（旧英国総領事館）	11 月 4 日	紅旗路（ソフト購入）
9 月 2 日	スウェーデン・ミッシン跡地	11 月 5 日	移動日：烏魯木斉ー北京
9 月 3 日	カシュガル日曜大バザール、聖者廟3箇所	11 月 6 日	移動日：北京ー東京
9 月 4 日	移動日：カシュガルーホタン（陸路）		

2. ウイグル文字文化の 20 世紀

2.1. 伝統的文字文化

文字と印刷・出版文化という視点から 20 世紀の新疆・ウイグル人の歴史を眺めた場合、その初期は依然として「先史」すなわち印刷以前の伝統的な写本文化の段階にあったとすることができる。アラビア文字活字を用いた印刷は 1912 年にイリとカシュガルで開始されていたが、出版物の絶対数は極めて少なかったと見られ、バザールで流通していたのはタシュケント、ブハラ、サマルカンドなど新疆外で印刷された石版本（リトグラフ）か、あるいは手で書写された写本が大半であった。そしてそれらの書物で使用されていた文章語がチャガタイ語である。

2.1.1. チャガタイ語

チャガタイ語（チャガタイ・トルコ語 *Chaghatay tili*）は「西方のオスマン語とともに、イスラームを受容した後のトルコ族が自らに獲得した真に古典語と呼ぶに相応しい言語」であり、「系統的にはカラハン朝トルコ語とホラズム・トルコ語を継ぎ、ティムール朝の下で詩人ナヴァーイーの天才により一挙に完成と洗練の域に到達」し、「東は東トルキスタン、西はクリミア、北はウラル、南はムガル朝インドという広大な地域で使用されていた」文章語である²。その言語的特徴、とくにその統語法に注目するならば、チャガタイ語は豊富なアラビア語とペルシア語の語彙にトルコ語の「てにをは」と基本動詞を接続して表現する構造を常套としており、両者の関係はわが国における和漢混交文によく似ている。各単語の正書法はそれぞれの親言語の綴りに忠実であり、アラビア語、ペルシア語いずれかに親しんだ者であれば、チャガタイ語そのものの知識が無くとも何とかそれを読みこなすことが可能で、現在のウイグル語に比べ非常に効率のよい言語であったと言える。今世紀初頭のウイグル人は、依然印刷技術こそ受容していなかったものの、チャガタイ語という中央アジア共通のプラットフォームを使用することによって、トルコ系民族のみならず、中東イスラーム世界とも通ずる「国際性」をその文字文化の中に有していたのである。

2.1.2. 20 世紀初頭の写本作者たち

この時期に作品を著した作者たちの中には、たとえばムッラー・ムーサー(Mulla Musa Sayrami)のように偶々ロシア人のパントツォフに見出されカザンでその著作を出版した者もいたがあくまで例外的であり、それすら広範に流通するものではなかった³。20 世紀初頭に新疆のバザールや知識人たちの間で「流通」していたウイグル人の著作は専ら手で書写した写本の形を取っていたものと想像される。

20 世紀初頭の写本作者としては、サイラムに生まれ自らの体験と優れた史料研究の成果として『安寧史 *Tarikh-i amniyya*』『ハミド史 *Tarikh-i hamidi*』等の歴史書を著したムッラー・ムーサー、イェンギヒサルの人で数多くの詩集とペルシア語の翻訳を残したナキス(Naqis / Sawur Akhun Khālpitim b. ‘Abdiqadir Yengisari)そしてカルガリク出身

で高名な詩人であったばかりか医学家，化学家としても名を成したタッジャリー(Tajjali / Mäwlanä Sä'id Mäzhär Qubbidin Shah oghli Hüsäyinkhan)等が知られ⁴，彼らは新疆でチャガタイ写本文化の伝統を継承した最後の世代であった。

2.1.3. 伝統的・文字文化を支えた文具

活版印刷技術の導入以前に新疆でつくられた写本は，伝統的に「ホタン紙(Khotän kaghizi)」と呼ばれる，桑('üjmä)や胡楊(toghraq)の樹皮の繊維を用いた手漉き紙に書かれていた。しかし 19 世紀末～20 世紀になるとロシア領から持ち込まれたやや上質な「コーカンド紙(Qoqand kaghizi)」や「ロシア紙(Oros kaghizi)」も用いられるようになる⁵。ホタン紙は通常は手で漉いた紙を乾燥させてそのまま使用するものであったが，より上等な工程を加えたものとしては，米の粥で作った糊で表面をコートし，ホタン特産の玉石(qash teshi)で磨きかけた「黄色紙 (seriq kaghiz)」という上質紙も生産されていた。ホタン紙の材料として桑が用いられていたのは，おそらくはホタンの特産品である絹の生産とも密接に関係していたものと考えられる。

紙に文字を書き込む筆記具としてはもっぱら河畔に群生するアシ(qomush)のペン(qalam)が用いられ，インク(siyä)はランプ(chiragh)に付着する煤と米粉を混合したものが用いられていた。このように，伝統的な文字文化を支えた文具はきわめて素朴な，生活に密着したものが用いられていた。



チャガタイ語写本： ホタン紙を用い，牛革で装丁した典型的な写本の例。

2.1.4. 「写本時代」の印刷物

写本時代といっても印刷物が全く無かったわけではない。清朝期には『御製勸善要言』など官製の書物の翻訳が木版の形で出版され，流布していたことが知られている⁶。また漢文の文献中にもたとえば対照地名・人名録である『欽定西域同文志』や漢，満，蒙，回，西の五文字を対照させた巨大な語彙集『御製五体清文鑑』などにはアラビア文字が刷り込まれている。しかしながらこれらはごくごく限られた範囲で利用・参照されたものであり，当時の新疆文字文化の主流でなかったことは言うまでも無い。

一方西方のフェルガナや遠くカザン，トルコでは早くから手書き写本をそのまま印刷した石版印刷（リトグラフ）や鉛活字を用いた活版印刷が行なわれ，ナヴァーイー(Mir 'Ali Shir Nawayi)の著作など中央アジア文学のマスターピースや宗教書が多数新疆では流通していた。

コラム(1)バシュ・カガズ・コチャ訪問 —ホタンの伝統的製紙業瞥見—

ホタン市内の北西部にはバシュ・カガズ・コチャ (lit.「上紙横丁」) という名の街区があり、伝統的な製紙業が今日まで営まれている。私は9月5日にこの地を訪問し、ようやく製紙の全工程を観察する機会に恵まれた。

「ホタンの紙」は写本時代に新疆南部全域で用いられ、欧州で発行された写本カタログなどに“Khotan Paper”としてその名が登場する。私はかねてから新疆の工業技術史的にも重要なこの紙が実際にどのように作られているのか実見してみたいものだと思っていたが、今回それがかなえられることになったというわけである。

現在バシュ・カガズ・コチャで製紙業を営んでいるのは僅かに職人マフスート・アホンの1家族のみで、原材料である桑 ('ujma)の樹皮の調達からバザールでの販売までのすべてを彼と彼の家族だけでまかなっているのだという⁷。

大雑把な工程は次の通りである。

- (1) 桑の樹皮を水に浸して柔らかくする
- (2) 樹皮の外側の粗い層を刃物で削り取る
- (3) 荒い層を削り取り残った桑の繊維を鍋で2時間ほど煮る。その際に漂白用の重曹も鍋に投入する。(図3)
- (4) 柔らかくなった桑を洗って絞る
- (5) 桑を木槌 (toqmaq) で叩き潰す(図4)
- (6) 粘土状の桑を専用の樽 (ton) に移す
- (7) 樽に水を注ぎ専用の棒(peshkok)でかき混ぜる
- (8) 樽から糊状になった原料を取り出し木枠に注ぎ(図5)
- (9) 短い棒で攪拌する
- (10) 漉いた紙を天火で干して出来上がり

完成した紙は往時のように本を作成するのに用いられることはまれで、もっぱら葉を包んだり、服を仕立てるときの台紙に用いられるほか、外国人観光客(特に日本人)が土産として購入することもある。

完成したホタン紙のサイズは 40cm×45cm。このホタン紙で作られる本は、おそらくはこのサイズを基準として2つ切りで 40cm×22.5cm、4つ切りで 22.5cm×20cm、8つ切りで

10cm×11.25cm 以内となる筈である。こういう規格でつくられた「写本」があるかどうか(=紙漉きの木枠のサイズは昔から変わっていないのか。そもそも紙のサイズの「規格」が存在したのかどうか)と言うのも興味深い問題である。



大鍋で桑の繊維を煮る



桑の繊維を木槌で叩き潰す



樽から木枠に糊状になった桑繊維を注ぐ

ウイグル語出版略年表(1900-1950)*

- 1912 年 2 月 イリ：『新報』（～1914）
- 1912 年 カシュガル：Swedish Mission Press 活版印刷開始（～1938）
- 1915 年 10 月 ウルムチ：『新疆公報』（147 号で停刊）
- 1918 年 ウルムチ：『天山日報』（『新疆公報』の後続紙）
- 1933 年 カシュガル：隔週刊'*Istiqlal*（『独立』）
- 1933 年 カシュガル：週刊'*Arkin Turkistan*（『自由トルキスタン』：～1934年2月?）
- 1933年7月 カシュガル：週刊 '*Sharqi Turkistan hayati*（『東トルキスタン生活』：～1933年11月）
- 1933年11月 カシュガル：'*Kashghar wilayat hukumat quruluşining bayan namäsi*（『カシュガル地区政府設立趣意書』）
- 1934 年 カシュガル：週刊'*Yengi hayat*（『新生活』：～1937年5月）
- 1935 年 雑誌『新疆』（維吾爾文化促進会・総会）『新しい声』（同喀什分会），『我々の声』（同タルバガタイ分会），『アクス通言』（同アクス分会），『星』（同カラシャル分会），『タクラマカン』（同ロプノル分会），『芽生え』（同コルラ分会）
- 1936 年 4 月 ウルムチ：『天山日報』，『新疆日報』と改称。
- 1936 年 ウルムチ：小冊子『政府目前主要任務』
- 1939 年 ウルムチ：月刊『反帝戦線』維文版（程なく停刊）
- 1940 年 ウルムチ：孫文『三民主義』上中下巻
- 1941 年 ウルムチ：月刊『反帝戦線』維文版（～1942 年停刊）
- 1943 年 ウルムチ：蒋介石『中国之命運』，『蒋介石言論』
- 1944 年 4 月 ウルムチ：雑誌『新新疆』維文版（紙欠乏のため 1 号のみ刊行）
- 1944 年 7 月 イリ：新聞'*Uchqun*（『火花』）
- 1944 年 イリ：'*Azad Shärqiy Türkistan*（『解放東トルキスタン報』：～1946 年 7 月）
- 1945 年 ウルムチ：『清白半月刊』
- 1945 年 イリ：パンフレット '*Biz - 'oghri 'ämäs, toghri*（『我々は賊にあらずして、義士なり』）
- 1945 年 5 月 タルバガタイ：新聞 '*Khäliq 'Awazi*（『民の声』～1949 年 10 月）
- 1945 年 ウルムチ：張治中『恢復弟兄間和氣與家庭間團結』『民族問題與政治問題』『擁護国家，服從政府』『只有實現三民主義才能使新疆不蹈過去歷史的覆轍』『当前新疆局部事变之利害的分析』
- 1946 年 ウルムチ：『天山画報』，『文摘』，『少年知識』，『天山文芸小叢書』
- 1946 年 2 月 イリ：'*Küräsh*（『闘争』）
- 1946 年 6 月-7 月 イリの'*Azad Shärqiy Türkistan*，'*Inqilabiy Shärqiy Türkistan*（『革命東トルキスタン』）と改称。
- 1946 年 9 月 タルバガタイ：'*Inqilabchil Yashlar*（『革命青年』：～1948 年 7 月）。
- 1946 年 9 月 ウルムチ：張治中『建設三民主義新疆之精神基礎』『為伊寧事件和平解決告全国同胞書』
- 1947 年 1 月 ウルムチ：『瀚海潮』。
- 1948 年 8 月 イリ：'*Algha*（『前進報』：～1950 年 6 月）。
- 1948 年 10 月 イリ：'*Ittipaq*（『同盟』：～1950 年 6 月）。
- 1950 年 1 月 1 日 ウルムチ：新版『新疆日報』（維・哈文）

*岡本雅享『中国の少数民族教育と言語政策』（東京：社会評論社，1999 年），陳世明『新疆現代翻訳史』（烏魯木齊：新疆大学出版社，1999 年）等の記事に基づき菅原純作成。

2.2. 「解放」以前の印刷・出版文化(1901-1949)

新疆ではじめて活版印刷を用いたウイグル語の出版活動が開始されたのは1912年のことである。この年、まず新疆北部の中心都市イリでは、辛亥革命の影響から発生した武装蜂起の結果樹立された「新伊犁都督府」が政府機関報として漢語とウイグル語の2つのヴァージョンの『新報』を創刊、また、時をほぼ同じくして新疆南部の中心都市カシュガルではスウェーデン伝道団印刷所が活版による「東トルコ語」版の聖書、パンフレット類の出版に着手している。この意味において1912年は新疆の「出版元年」とも呼ぶべき年であった。

1912年から1949年のいわゆる「新疆和平解放」（中華人民共和国の成立～新疆省の編入）までの時期の主な出版物は、別表（7頁）に挙げた通りである⁸。なにぶん当時の出版物に関しては情報が極めて限られているため多くの遺漏があると思われるが、当時の新疆省の省都であったウルムチのほか、1933年に東トルキスタン・イスラーム共和国が成立したカシュガル、1944年に東トルキスタン共和国（「三区革命臨時政府」）が成立したイリの3都市で出版されたものが多いことが見て取れる。本節ではこれら3都市における出版活動を個別に見ていくこととする。

2.2.1. ウルムチの出版物

ウルムチのウイグル語出版物は、新疆省政府の所在地という性格上、もともとは漢語で書かれていた中国（国民党）政府の公報の翻訳が大半を占めていた。その代表的なものが1915年に発刊された『新疆公報』である。本報は新疆省公署（政府）の機関報であり、その後1918年に『天山日報』、1936年に『新疆日報』と改称され、今日の『新疆日報』（1950年に改組）に至るまで、一貫してウルムチの政府公報として機能しつづけている。同様の逐次刊行物としては『反帝戦線』（国民党新疆党部、1939）、『新疆』（国民党新疆党部、1944）、『清白半月刊』（国民党新疆党部文化工作団、1945）、『瀚海潮』（新疆省文化運動委員会、1947）などが刊行されていた。単行本としては孫文、蒋介石の著作の他、1935年に開催された第二次全疆民衆代表大会でときの指導者盛世才が発表した新疆の建設方針、戦略に関するパンフレット『政府目前主要任務』（ブルハン・シャヒディ Burhan Shahidi 翻訳）や、1944年にイリで勃発した民族蜂起に際し国民党中央軍事委員会政治部長の張治中が発表した講話『恢復弟兄間和氣與家庭間團結』『民族問題與政治問題』『擁護国家、服從政府』『只有實現三民主義才能使新疆不蹈過去歷史的覆轍』『当前新疆局部事变之利害的分析』（ポラット・カーディル Polat Qadir 翻訳）など、折々に政府指導者（漢族）がウイグル人を「含む」全地域住民を対象に発した政治パンフレットの翻訳が多数出版された。

他方、少々趣を異とするものとして、1934年にウルムチで設立されたウイグル族文化促進会総会の雑誌『新疆』（1935）がある。文化促進会はもともとは盛世才政権が設立した団体であったが、実際は「盛世才の思惑をはるかに越えて」ウイグル人が積極的にこれに参加し活発な文化運動を展開したといふ。雑誌そのものがどのようなものであったかは文献に記述も無く、現物も見ることが出来ないため詳細は不明ながら、前述の政治パンフレットの類とは一線を画す性格の出版物であったことと想像される。

ウルムチの出版物に関連して注目すべきは、漢語からウイグル語への翻訳がこの時期に政府の主導で組織的に始められたという点である。1935年には新疆省教育庁翻訳委員会が成立し、少数民族文字の教科書の編訳に着手、1938年までに30万冊の教科書を出版したといひ、1940年には新疆文化協会編訳部により200余種4文字種の小中高向けの教材が出版されていたという。また1946年には新疆省編訳館が成立し『天山画報』ほか数種の雑誌を刊行している。これらの「公式」な翻訳活動は例えば1928年の「実施漢人読回文、回人読漢文之方針」や1946

年の「東トルキスタン共和国」との「和平條款」あるいは新疆省聯合政府の綱領などで明文化された漢・回（ウイグル）両文字使用の原則に反映された，当時の新疆省政府（とりわけ 1946-47 年にイリの「東トルキスタン共和国」とウルムチの国民党政府の和平協定締結の結果成立した新疆省聯合政府）の政策に基づくものであることは疑いない。のちの新体制＝中華人民共和国下の新疆維吾爾自治区に受け継がれることとなるマルチリンガル政策は実にこの時期に打ち出されたものであり，その功績は認められて良いであろう。

2.2.2. カシュガルの出版物

新疆南部の中心都市カシュガルでは 1894 年よりスウェーデンの伝道団が布教活動を行っており，1901 年には謄写版を利用した簡易印刷(? cyclostyle print)によるパンフレット類の出版が行なわれていた。印刷物の需要が高まり，スウェーデン本国から活版の印刷機フルセットを導入し，本格的にスウェーデン伝道団印刷所 Swedish Mission Press として操業を開始したのが先に述べたとおり 1912 年のことである。

ウルムチの出版活動が徹頭徹尾政府の主導で行なわれたのに対し，カシュガルのそれは伝道団自身が伝道目的でパンフレット類を出版する傍ら，クライアントから仕事を請け負い印刷したものも含まれていた。実際 Gunnar Jarring 氏がまとめた当印刷所の出版物リスト¹⁰を見ると，その出版物の内容は非常に幅広い範囲で行なわれていることが分かる。基本的には伝道という目的があり，その目的のために出版された聖書の部分訳や賛美歌集，宗教パンフレットの類も相当数出版されたが，伝道の一環として行なわれた文化普及事業のための綴りの教科書や暦，医学書などの実用書，読み物や小説の類も出版物の中には多数含まれている。

1933 年カシュガルにウイグル人の革命政権である「東トルキスタン・イスラーム共和国」が成立すると，スウェーデン伝道団印刷所はその革命運動の中で大きな役割を果たすこととなった。革命派の機関紙であった *Istiqlal*（『独立』：1933）や，*Arkin Turkistan*（『自由トルキスタン』：1933-34），*Yengi hayat*（『新生活』：1934-37）をはじめ，革命政府の設立趣意書(1933.11)はては紙幣の印刷まで手がけ，当革命運動の宣伝活動の一翼を担った。東トルキスタン・イスラーム共和国はその後程なく 1934 年 2 月に瓦解し，伝道団印刷所はその後カシュガルを支配したトゥンガン(回民)軍閥のために紙幣の印刷などを請け負っていたが，伝道団全員が国外退去を強いられた 1938 年についに操業を停止した¹¹。



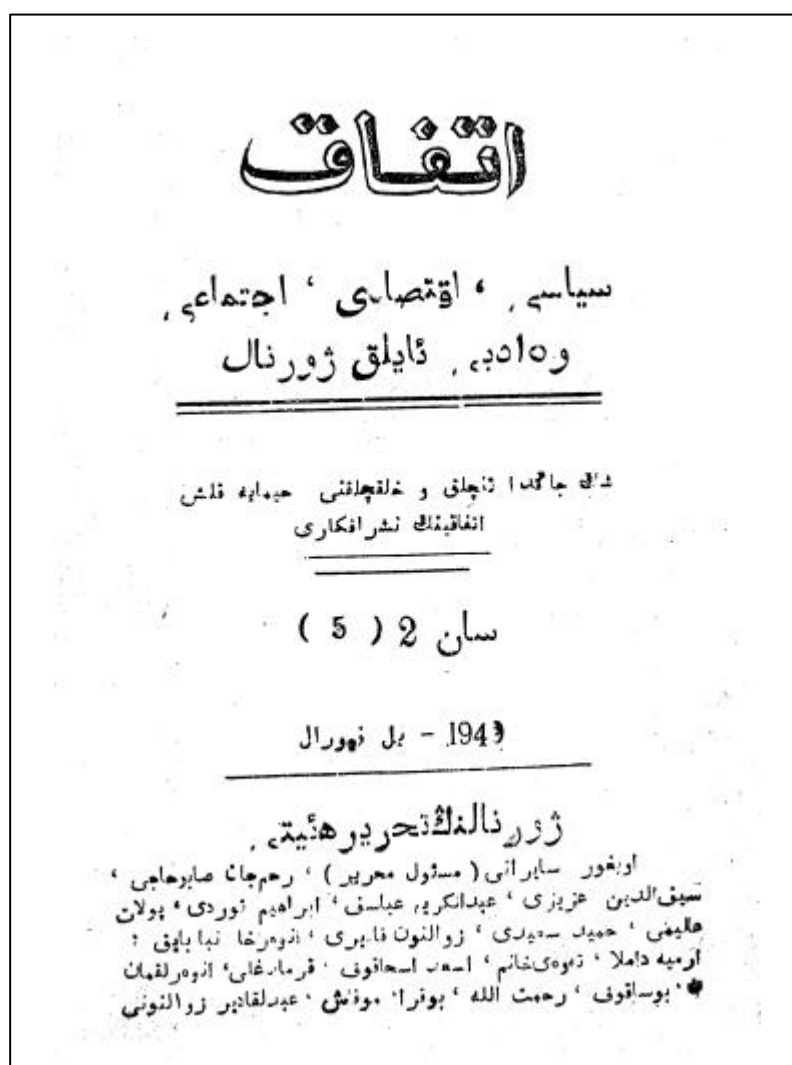
スウェーデン伝道団印刷所で出版された「東トルコ語」のアルファベット教本(左：新免康氏提供)と

印刷所内の作業場(植字)風景(右：Jarring, G., *Prints from Kashghar*, p.10)

2.2.3.イリの出版物

1944 年、イリでは9月のニルカ蜂起を契機として民族蜂起が勃発し、11月にイリ、アルタイ、タルバガタイの三地区を境域とする東トルキスタン共和国（東トルキスタン人民共和国臨時政府）が成立した。イリでの出版物の多くはこの民族蜂起—革命運動の中で出版されたものである。

まず民族蜂起勃発前に出版されたものとしては謄写版印刷の新聞'uchqun（『火花』：1944.7）があり、これはイリの民族解放組織の機関紙として出版されたものである。その後民族蜂起が勃発し「東トルキスタン共和国」が樹立されると、革命政府の機関報'Azad Shārqiy Türkistan（『解放東トルキスタン報』：1944-46、1946年に'Inqilabiy Shārqiy Türkistan=『革命東トルキスタン』と改称）、革命青年組織の機関報 Kūrāsh（『闘争』：1946-48）等が出版され、ウルムチ国民党政府との「新疆聯合政府(1946-47)」解消後には新疆保衛和平民主同盟の機関報'Algha（『前進報』：1948-50、主編サイピディン・アズィズイ Saypidin 'Aziz）、'Itipaq（『同盟』：1948-50、主編アフマトジャン・カスィミ Ahmadjan Qasimi のちウイグル・サイラニ Uyghur Sayrani）などが刊行された。



1949 年 11 月発行の'itipaq 誌第 5 号扉（新免康氏提供）

2.3. 「解放」後の印刷・出版文化(1949-1980s)

2.3.1. 「新疆和平解放」と新たな出版事業

1949年9月に新疆省政府は国民党政府との関係を断絶し、毛沢東の人民政府への帰順を表明した。それを受けて人民解放軍が10月20日にウルムチ、12月にはイリ地方に入り、ここにいわゆる「新疆和平解放」が実現した¹²。

同年12月17日に新疆省人民政府が成立し、共産党指導の新体制のもと機構改革が行なわれ、翌々年の1951年3月15日に新疆人民出版社が成立している。同出版社は新疆省文教委員会編訳処を基礎として組織され、漢・ウイグルのほかにかザフ、(トド・)モンゴルの各文字による教科書や雑誌の出版を主たる任務としていた(のちにシボ、キルギスも追加)¹³。

新疆人民出版社の初代社長をつとめた章克の回想によれば、同社成立時の印刷・出版事業は人材と物資不足のため様々な困難に直面していた。特に問題であったのが印刷工場の手配であった。当時民族文字の印刷物を印刷できたのは新聞『新疆日報』の印刷工場のみであり、新聞の印刷業務という本来の業務がある以上、人民出版社が独自の計画のもと自由にそれを利用することは期待できなかった。この問題を解決するため新疆省政府はまず当時様々な印刷業務のほか造幣業務も行なっていた新疆印刷廠を書物の出版事業専門の印刷工場に転換させ、ソ連から最新鋭の印刷機2台を取り寄せると共に北京の民族印刷廠の援助のもとウイグル文、カザフ文の銅活字2セットを鋳造して問題の解決を図ったという。

かくして新疆人民出版社の出版事業は本格的に始動し、成立1年目には各種教科書のほか『工農識字課本』、雑誌『新疆宣傳員』など漢、ウイグル、カザフ、モンゴルの4種類の文字で182種類266万冊の出版を達成した¹⁴。以後、50年代の出版物としては同社は「馬恩列斯」すなわちマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンそして毛沢東といった社会主義政権に欠かせぬテキスト類、党幹部の政治学習教材、科学技術書、文芸読み物、小中学校教科書などの出版を行なった¹⁵。



新疆人民出版社創業時の逐次刊行物『新疆宣傳員』（『新疆人民出版社40年記念画冊』30頁）

2.3.2. 文字改革(1)キリル文字改革

「解放」後の新疆の出版・印刷事情および文字文化を考えるためにはまず3度に及んだウイグル語の文字改革のプロセスを把握する必要があるだろう。これらの改革は現在にいたるまでウイグル人社会に影を落としている、ウイグル文字文化史の大問題である。

「解放」後の数年は世に言う中ソ蜜月時代であり、ソ連はその領土の東隣に出現した新興社会主義国家に惜しめない援助を与えた。ソ連と国境を接している新疆もちろんその例外ではなく、多くの人材(技術顧問)、物資がソ連から供与された。例えば新疆人民出版社では主として当時のソ連領中央アジアから7名の翻訳家を招聘し、それらの「専門家」たちはロシア語からウイグル語・カザフ語への翻訳のみならず編集、製版技術などについて指導を行なったという¹⁶。

新疆における文字改革を研究したベラー・ハン女史によれば、1956年に新疆ではウイグル語、カザフ語をアラビア文字からキリル文字への切り替えが決定され、学校教育の場でも試験的にキリル文字が教えられたという。こういう動きは明らかに中ソ蜜月を反映したものであったといえる。しかしながら、同年行なわれたフルシチョフのスターリン批判を契機としてやがて中ソ対立が発生、ソ連からの援助が打ち切られ、技術顧問が召還されるなど両国の緊張関係が生ずるにおよんでキリル文字化の企てはあっさり解消されるに至った。そしてその代わりに浮上したのが漢語ピンイン字母に基づくラテン文字への改革案である¹⁷。

01. A a = a	15. O o = o	29. Ъ ъ = ʼ
02. Б б = b	16. П п = p	30. Э э = è
03. В в = w~v	17. Р р = r	31. Ю ю = yu(~yü)
04. Г г = g	18. С с = s	32. Я я = ya
05. Д д = d	19. Т т = t	33. Қ қ = q
06. Е е = e	20. У у = u	34. Ғ ғ = ğ
07. Ж ж = ž	21. Ф ф = f	35. Ү ү = ü
08. З з = z	22. Х х = x	36. Ө ө = ö
09. И и = i	23. Ц ц = c	37. Җ җ = j
10. Й й = y	24. Ч ч = č	38. Ө ө = ä
11. К к = k	25. Ш ш = š	39. Һ һ = h
12. Л л = l	26. Щ щ = šč	40. Ҡ ҡ = η
13. М м = m	27. Ъ ъ = ~	41. (Ё ё = yo)
14. Н н = n	28. Ы ы = ı	42. (' = ')

ウイグル語キリル文字

(R.Hahn, *Spoken Uyghur*. Seattle and London: Washington University Press, 1991., p.103)

2.3.3. 文字改革(2)「新文字」の登場と文化大革命

1959年新疆ウイグル自治区文字改革委員会はローマ字式のウイグル語・カザフ語文字をつくり、従来のアラビア文字からの転換を決定した。この文字は新文字 (*Yengi härp / Yengi yeziq*) と呼ばれ、1957年に公布された漢語のピンイン法案に基づいたものであった。

新文字への改革の道は平坦ではなく、その決定から本格的な使用までは非常に長い時間を要した。1960年に新文字は公布され、その普及に向けて1964年までは新文字教員の育成や、各地で文字学習が行なわれ、そうした準備を経て1965年ようやく自治区は全地域での新文字の本格使用(公布・施行)にこぎつけたのである。しかしながら程なく1966年にプロレタリア文化大革命が勃発したため新文字の普及は遅れ、計画の最終段階にあったアラビア系文字(旧文字 *Kona härp / Kona yeziq* と呼ばれる)の公式的使用の廃止は1976年の8月1日ようやく実施された¹⁸。

この新文字が使用された時期の大半は文化大革命期にかかっているため、新文字を使用した出版物の種類はそれほど多くは無かったと思われる。文化大革命期の「聖典」であった『毛主席語録』をはじめとする政治学習向けのパンフレットの他には、『新疆ウイグル自治区地図集』(1966)、『漢維詞典』(試編本、1974)『維漢詞典』(1982)などが新文字で出版された。

01. A a = a	12. L l = l	23. W w = w
02. B b = b	13. M m = m	24. X x = š
03. C c = s	14. N n = n	25. Y y = y
04. D d = d	15. O o = o	26. Z z = z
05. E e = e	16. P p = p	27. Ol ol = ğ
06. F f = f	17. Q q = č	28. H h = h
07. G g = g	18. R r = r	29. K k = q
08. H h = x	19. S s = s	30. Ə ə = ä
09. I i = i	20. T t = t	31. Θ θ = ö
10. J j = j	21. U u = u	32. Ü ü = ü
11. K k = k	22. V v = w~v	33. Z z = ž
34. Ch ch = č	36. Sh sh = š	
35. ng = ŋ	37. Zh zh = j	

ウイグル語新文字

(R.Hahn, *Spoken Uyghur*. Seattle and London: Washington University Press, 1991., p.100)



YAXISUN ULUK USTAZIMIZ, ULUK DAHIMIZ,
ULUK TONGSHUƏYIMIZ, ULUK ROLQIMIZ MAO ZHUXI!
YAXISUN! TÛMƏN MING YILLAR YAXISUN!

LIN BIAO

1967-yil «1-May» bayrimi.

新文字で出版された『新疆ウイグル自治区地图集』(1966)と同書掲載の林彪の献辞「毛主席万岁」

2.3.4. 文字改革(3)旧文字の復活と「文芸復興」

前述の通り、1976年8月に新疆ウイグル自治区革命委員会はウイグル・カザフ両言語の旧文字の使用を停止と新文字への完全な移行を実施したが、結局この施策は当事者であるウイグル人・カザフ人の受け入れるところとならず、1979年、3年足らずで政府は事実上老文字廃止を撤回している。その後1982年に自治区人民政府は「ウイグル・カザフ旧文字の全面的使用に関する決議」を発し、ここに旧文字は公文書、教育など各方面での完全復活を果たしたのである¹⁹。

新文字が完全復活を果たした1980年代は、1976年の文化大革命の終結とその後打ち出された（改革・近代化路線の一環としての）民族文化振興政策によって、ウイグル語出版が「文芸復興」と呼ぶに相応しい活発な発展を遂げた時期であった。ウイグル文字文化の代表的な著作としてマフムート・カーシュガリ—Mahmud al-Kashghari の『トルコ語辞典(*Turk tillar diwani*)やユースフ・ハス・ハジプ Yusuf Khass Hajip の『幸福の知恵(*Qutadghu bilik*)』等が出版された他に、多くの文芸作品、実用書などが出版され、*Bulaq* (『源泉』), *Tarim* (『塔里木』), *Dunya 'adibiyati* (『世界文学』) など雑誌の創刊も相次いだ。

1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7
01.		ا	ا = a (01)	a			18.	خ	خ	خ	خ = x (08)	xe	
02.		ه	ه = ä (02)	ä			19.	د	د	د	د = i (31)	i	
03.		د	د = d (09)	de			20.	ب	ب	ب	ب = e (30)	e	
04.		ر	ر = r (10)	re			21.	ي	ي	ي	ي = y (32)	ye	
05.		ز	ز = z (11)	ze			22.	س	س	س	س = s (13)	se	
06.		ژ	ژ = ž (12)	že			23.	ش	ش	ش	ش = š (14)	še	
07.		و	و = o (25)	o			24.	غ	غ	غ	غ = ğ (15)	ġe	
08.		ۆ	ۆ = ö (27)	ö			25.	ف	ف	ف	ف = f (16)	fe	
09.		ۇ	ۇ = u (26)	u			26.	ق	ق	ق	ق = q (17)	qe	
10.		ۈ	ۈ = ü (28)	ü			27.	ك	ك	ك	ك = k (18)	ke	
11.		ۋ	ۋ = w (29)	we			28.	ڭ	ڭ	ڭ	ڭ = ŋ (20)	ŋe	
12.	ب	ب	ب = b (03)	be			29.	گ	گ	گ	گ = g (19)	ge	
13.	پ	پ	پ = p (04)	pe			30.	ل	ل	ل	ل = l (21)	le	
14.	ت	ت	ت = t (05)	te			31.	م	م	م	م = m (22)	me	
15.	ن	ن	ن = n (23)	ne			32.	ه	ه	ه	ه = h (24)	he	
16.	ج	ج	ج = j (06)	je			33.	ئ	ئ		= (')		
17.	چ	چ	چ = č (07)	če			34.		لا	لا	= la		

ウイグル語旧文字

(R.Hahn, *Spoken Uyghur*. Seattle and London: Washington University Press, 1991., p.97)

旧文字の復活と「文芸復興」は 1980 年代から今日にいたるウイグル人の出版活動に大きく貢献した。しかし、その一方で 1960-1970 年代に新文字で教育を受けた一定の世代には文字を再び学びなおすなど負担を強いることともなった。この世代は独学で旧文字を学ばない限り現行のウイグル語出版物を読むことが出来ず、家族と手紙のやり取りにも支障をきたしている。この意味において旧文字と新文字をめぐる問題は依然解決しておらず、こうした問題を抱えたままウイグル文字文化はつづく 90 年代後半～現在にいたるコンピュータと電子ネットワークの発展という新局面を迎えたのである。

コラム(2)ホタン市文明印刷廠訪問

ーやっと見つけた鉛活字印刷所ー

9 月 7 日、友人の友人であるメットケリム・イスマイル氏（ホタン地区文物管理处）に案内していただき、ホタン旧市（イルチ）内のクズク・ダルワサ路にある「ホタン市文明印刷廠」を訪問した。この印刷廠はホタン市の名前が冠せられているものの現在は民間の会社であり、現在も鉛活字を使用して便箋や名刺といった、ごく一般的な印刷物を手がけている。あいにく責任者が烏魯木齐に出張中ということで実物の入手は見合わせざるを得なかったが、現在実際に使用されている 2 号,4 号,5 号の 3 種類のウイグル語鉛活字を初めて実見する機会を得た。

1990～1995 年にかけて新疆の出版界は全面的に鉛活字からオフセット印刷への転換が行なわれ、現在自治区首都の烏魯木齐市では鉛活字そのものを見つけるのさえ難しくなっている。そういう意味でここで活字印刷を実見できたのは極めて貴重な体験であった。（後日ホタンとウルムチのちょうど中間に位置するコルラ市の印刷廠が多数鉛活字を所有していることが分かり、知人を介して交渉した結果フルセットを入手することが出来た。）



ホタン市文明印刷廠。中央左がメットケリム氏（和田地区文物管理处）とようやくめぐりあえたウイグル語鉛活字。

3. ウイグル文字文化の現状ーデジタル化へ向けてー

3.1. 行政の取り組みー民族語言文字工作委员会の仕事ー

3.1.1. 民語委とは

社会主義国中国にあって、少数民族語の言語・文字管理は行政府の専管事項として一行政機関がその管理にあたっている。それがここで紹介する民族語言文字工作委员会(*Shinjang 'Uyghur Aptonom Rayonluq Millätlär Til-Yeziq Khizmät Komiteti*)である。今日の新疆の言語・文字の状況を理解するためにはまずこの行政機関が如何なる経緯で設立され、如何なる任務・権限を帯びて仕事を行なっているかまず明らかにする必要がある。

今回の調査では、幸いにも私の留学時代の恩師であるミールスルタン・オスマノウ教授が民語委のOB(「退休幹部」)であったため、教授から民語委の呉景寿書記(シボ族)をご紹介いただいた。呉書記は私の調査の趣旨に理解を示され、民語委の概要を紹介する「新疆語言工作40年」と題する資料⁰のコピーを下さり、また各少数民族から一人ずつスタッフを招集し、2度にわたってインタビューの場を設けていただいた¹。以下の部分での基本情報はそのインタビューと資料とに基づいている。

3.1.2. 沿革と現状

民語委の沿革は、「新疆和平解放」(1949)後に、新疆における少数民族言語・文字の管理を民間団体が「兼管」してきた方法をあらため、政府がこの管理を担当すべくその職能を明確化したことに始まる。政府は1950年に新疆省少数民族語言文字研究指導委員会を、ついで1952年には新疆省少数民族語言文字研究改革委員会を成立させ、これらがのちの民語委の雛型となった。これらの機関は1950年代に主として言語及び民族識別、言語調査に従事し、各民族の言語・文字の使用状況、言語・文字の構造、特徴を明らかにする仕事を行なった。これらの機関は1950年代半ばから盛んになったキリル文字やラテン文字を使用させるウイグル語の文字改革にも重要な役割を果たしていた

1966年から10年間にわたり展開されたいわゆる「プロレタリア文化大革命」によって新疆の言語・文字管理行政はほぼ中断していたが、1973年に組織が改組され、文字管理行政機関として「自治区民族語言文字工作委员会」という現行の名称が使用されることとなる。1976年に毛沢東の逝去をもって文化大革命が終結した後はその本格的な活動が再開され、全自治区的に政府がその強化を打ち出した言語・文字管理行政の担い手として重要な役割を果たすこととなった。

今日の民語委は新疆ウイグル自治区政府が制定・公布した『新疆維吾爾自治区漢語言文字使用管理暫行規定』を執行する自治区政府直属の機関として、ウイグル語をはじめとする少数民族語および文字の管理行政にあた

っており、具体的には以下に挙げる 6 項目をその主たる任務の柱(職責)に置いている。

- (1) 「民族語言文字」の公務活動での使用の保障，社会での複数言語表記の徹底
- (2) 民族言語・文字の規範化・標準化
- (3) 漢語普通話と規範漢字の普及
- (4) ホトム・モンゴル文の普及
- (5) 民族語の研究と翻訳
- (6) 少数民族語の文字コードの制定・DTP 環境の構築を中心とする情報技術の開発

「民族語言文字」の公務活動での使用の保障，社会での複数言語表記の徹底： 民族自治区として新疆ウイグル自治区政府は少数民族文字を公務活動に使用することを原則としている。自治区政府の各レベルの会議議事録，裁判記録，法律，布告にいたるまでひとしく漢語と複数の少数民族語を使用することとなっており，この方針を周知徹底させる職責を民語委は負っているのである。これは少数民族の言語文化の保護に関わる活動であり，まちな商店の看板の両言語(漢語・ウイグル語)併記を徹底させることなどもその職務には含まれている。実際，烏魯木齊ではどの店舗でも公共機関でもかならず漢語とウイグル語が併記されており，それは外資系のホテルや香港発の衣料チェーン店なども例外ではない。民語委は 1998 年より自治区内の 15 地域に 150 の「監督証」を発行し，その監督証を帯びた人間が各地の工商管理処と共同でそれら看板の点検を行ない，違反者には 500—1000 元程度の罰金を科すこともあるという。



漢語とウイグル語を併記した看板の例

民族言語・文字の規範化・標準化： 少数民族の言語の正書法を画定し，漢語・外来語の適切な訳語を制定するルール作りの活動であり，今日までに正書法，発音，基本名詞に関する各辞書のほか，科学技術辞典，膨大なウイグル語の語彙を網羅した『ウイグル語詳解辞典』などをリリースしている。

民族語の研究と翻訳： 各民族語をめぐる学術的な諸問題に関する研究活動であり，機関紙『言語と翻訳（語言與翻譯; *Til vä tärjimä*）』を定期刊行するほか言語研究に関する学術書を出版している。

少数民族語の文字コードの制定・DTP 環境の構築を中心とする情報技術の開発： 少数民族語の文字コードの制定に民語委が本格的に関わりをもち始めたのは 1990 年代に入ってからのことである。当初制定作業が行なわれたものはウイグル、カザク、クルグズ、シボなどの文種の「国家標準」すなわち使用を中国国内に限った文字コードであった。民語委はひきつづき 1990 年代後半から国際コードの制定に着手し、1998 年の ISO (国際標準化機構) デンマーク会議以降コンスタントにスタッフを国際会議に派遣している。ISO-10640 コードにおけるシボ文、満文のコード (モンゴル文字領域内)、ISO-10646 におけるウイグル語字母 (アラビア文字領域内) などは民語委がその制定に深く関わっているのだという。一方、DTP については 1990 年に『ウイグル、漢、カザク、クルグズ、英、ロシア、多文種軽印刷排版および弁公自動化系統』(「博格達」系統) を北京のコンピュータ会社の助力の下開発し、これは新疆における多言語 DTP システムの第一世代として 1990 年代末まで実際に第一線で使用された。ついで『計算機シボ文、満文文字処理と軽印刷系統』(1996) 『新疆 2000 民文多文種文字処理と排版系統 (DTP システム) 』(1999) などを発表している。最新型の『新疆 2000』は総予算 12 万元を投資を投下して開発された新システムであり、さきの「博格達」系統に比して文字装飾やレイアウトの機能が強化されている。

3.1.3. 今後の計画

民語委は今後の活動指針として、情報化に関して主として 3 つの柱からなる「5 ヵ年計画」を立案・推進している。まず(1)フォント整備 (ISO10646 対応アラビア文字フォントの開発) である。数次の国際会議で現代ウイグル語の国際文字コード規格はほぼ固まりつつあるが、そのコードに対応したフォントは何とまだ存在していない。したがって民族語を内包したユニコード・フォントの整備が急務であるという。つぎに(2)オペレーティング・システム (OS) への対応。現在使用されているウイグル語のアプリケーション・ソフトウェアは DTP をはじめ DOS 上で動くものだけであり、広く使用されている OS である Windows (中文) に対応したものは無い。しかもその操作法は極めて複雑で分かりにくい。広く普及している Pagemaker や Quark Express のように、Windows にも対応し、かつ平易なシステムを開発する。さいごに(3)インターネットへの対応。「新疆語言文字ネット」という名前で 2001 年ホームページを立ち上げる。ただし、当面の文字表記はラテン文字で行うという。

3.1.4. 民語委の果たすべき責務

今回の調査で方々に耳にしたのは、文字コードをはじめウイグル語をコンピュータで処理するにあたって必要となる「基準」というものが全然存在していないということであった。まず文字コードは「ユニコード」という言葉のみが一人歩きして各開発者がそれぞれ勝手に「ユニコード・フォント」なるものを開発して販売しており、異なる「複数」の「ユニコード」が存在する、という矛盾に満ちた現状を作り出している。この問題を解決するためには次節で述べるように「公式の」ウイグル語ユニコード (ユニコードを用いた公式のウイグル語コード配置) を画定する必要があるものであり、それは政府—民語委の専管事項である。

文字コードのみならず、たとえばキーボードの文字配列、文字ソートオーダー、インターネットで利用されるラテン文字正書法の問題も文字規格に関わる問題である以上、すべて民語委が画定の責を負っている筈であり、民語委の果たすべき役割は甚だ大きいというべきであろう。民語委の強力なリーダーシップがあってはじめてコンピュータのウイグル語処理環境は確固たる基準を獲得することが可能になるのであり、今後のよりいっそうのデジタル化の進展のためにも民語委の火急かつ強力な対応が期待される。

3.2. ウイグル語出版・印刷事業の現状と課題

3.2.1 概要

今日、ウイグル語の出版事業は北京の民族出版社(*Millätlär nāshriyati*), ウルムチの新疆人民出版社(*Shinjang khālq nāshriyati*), 新疆青少年出版社(*Shinjang yashlar-'ösmürlär nāshriyati*), 新疆教育出版社(*Shinjang ma'arip nāshriyati*), 新疆大学出版社(*Shinjang 'uniwersiteti nāshriyati*), カシュガルの喀什維吾爾文出版社(*Qāshqār 'Uyghur nāshriyati*) の 6 社が主として行なっており、これらのほかに雑誌、新聞などがそれぞれ個別の企業、機関単位で出版を行なっている²²。

ウイグル語の書籍がトータルでどれほど出版され流通しているかと言う統計情報は明らかにはされていない。唯一新疆最大手の新疆人民出版社の場合、その出版活動については毎年刊行される『新疆年鑑』等でその概要を窺い知ることが可能である。それによれば1998年同出版社が出版した書籍379種のうち214種(56.5%)はウイグル語を中心とする「民文書」が占め、1999年には458種中275種(60.0%)を「民文書」が占めているという²³。この「民文書」の占める比率は1951-1990年の統計でも平均70%を維持しており²⁴、ウイグル人を主体民族とする民族自治区の国営出版社として、新疆人民出版社が相応の努力を払っており、一定の割合で民文出版物の出版事業を推進していることが窺われる。

3.2.2. 現在の出版工程の実際

8月26日、新疆人民出版社の文芸誌、『ブラク（源泉）』誌の副編集長である友人のメメトトゥルディ・ミールザーフマド Mämätturdi Mirzähmäd 氏のオフィスを訪問した。現在の新疆における出版技術の現状について、そのあらましを教えていただくことがこのときの訪問の目的である。従来の鉛活字から電子製版へはいつごろ移行したのか、現在コンピュータはどの程度使用されているのか、使用されている場合いかなるソフトウェアを使用しているのか、そして具体的な工程はどのようなものなのか、といった点について丁寧に教えていただいた。以下はメメトトゥルディ氏と、氏のオフィスで主に技術面を担当しているアブドレリム Abdulälim 氏から伺った内容をまとめたものである。

新疆人民出版社をはじめとするウルムチの出版業界がコンピュータを導入し、DTP 導入への試みを開始したのは1987-89年頃のことである。このころはまだ鉛活字が印刷の主力であり、DTPによる出版物は試験的な出版物に限られていた。DTPが通常の印刷工程に組み込まれ、鉛活字からの転換が開始されたのは1993年のことである。それから7年経過し、現在では烏魯木齊の出版業界はほとんどがDTPへの転換を完了している。現在鉛活字を使用しているのは地方の小さな印刷所か、中小単位(企業～学校など)の印刷廠等に限られるという。

現在、新疆でのウイグル語出版物はだいたい以下のような工程を経て出版されている。

(1) 手書き、タイプ、パソコンのウイグル語ソフトで作成され出力された原稿をもとに専門のタイピストが出版社のコンピュータにあらためて手入力する。出版社で現在使用されているコンピュータのシステム(系統)は中国内地(北京)で組まれた「三立」「華光」などの出版産業用のシステムであり、MS-DOS上で動いているが、現在コンシューマ向けに開発され市販されているウインドウズ用のウイグル語アプリケーションで作成された文書ファイルとの互換性は一切無い。従って原稿はいかなる形であれあらためて手入力される。

MS-DOS の上で動いているものならば、ちょっと工夫すればテキストのコンバートなぞ簡単に出来そうなものであるが、技術的な理由からではなく権利上の理由から、「三立」「華光」サイドがそうした変換プログラムの使用を制限しているためにそれが出来ない状況にある。

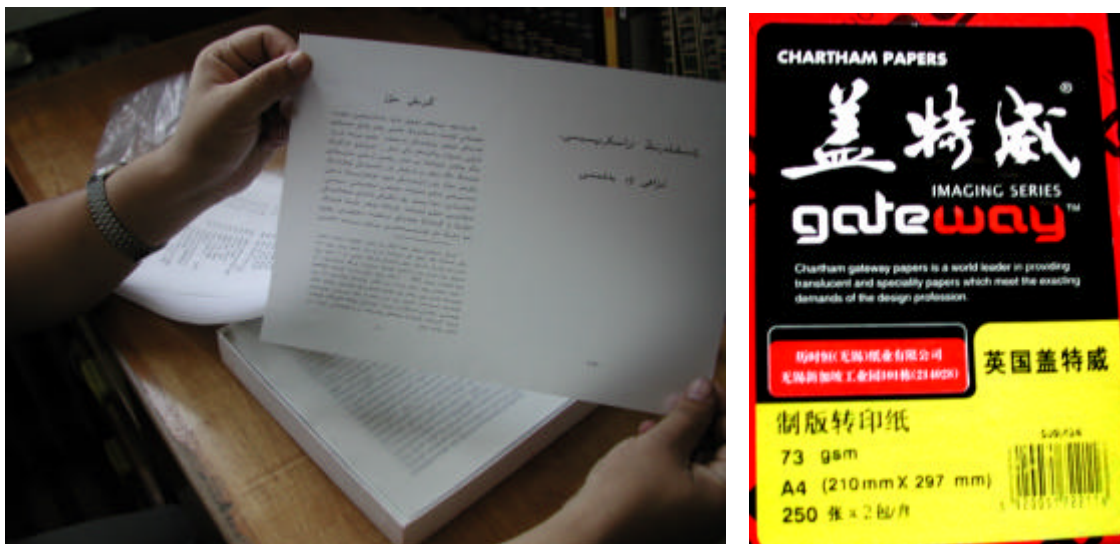
↓

(2) 「三立」「華光」上で入力されたテキストを適宜レイアウトする。現行の DTP システムはアラビア文字の地のテキストにラテン文字でタグを入力し文字を配置し、プレビューで出来を確認しつつ微調整を行なうもので、その作業には熟練を要する。

↓

(3) ページ・プリンタで半透明の"Chartham Paper"に完成したファイルをプリント・アウトする。ここまでは出版社側の仕事で、この後印刷所では Chartham Paper から光学的に製版が行なわれ、印刷される。

現在のウイグル語出版は紙入稿という方式をとっているため、フィルムを用いたカラー印刷には対応しておらず、その品質において今日のわが国の印刷技術水準とはかなりの差がみとめられる。この件については 11 月の補足調査で新疆最大の印刷会社である新疆新華印刷廠を訪問し、ウイグル語印刷の担当者に話を伺った。担当者によれば同印刷廠でも高品質の印刷には十分対応しており、ドイツ製の製版機器も完備されているが、それらの機器がひとしくこの業界の標準機である Macintosh 対応であるためウイグル語の処理は出来ないという話であった。従って、今後ウイグル語出版がより高品質を追求するのであれば Macintosh での処理を可能にする環境（互換性を考慮した DTP システム）を整備する必要があるであろう。



Chartham Paper に印字された版下(左)と英国製 Chartham Paper のパッケージ(右)

3.2.3. DTP システム『三立印王』

メメトウルディ氏のオフィスでみせていただいた DTP システムは『三立印王』というシステムで、初期画面によれば 1997 年 6 月に北京でリリースされたものである。このシステムは下の図版で示すように初期画面で全作業工程が把握できるようになっている。なお、画面中に MICROSOFT WINDOWS とあるのはあくまで同一の端末でウインドウ

を使用するときに選択する（ブート？）ボタンであって、ファイルの互換を保証するものでは全然無い。メメントゥールディ氏のオフィスではウイグル語出版物のためにこのシステムを使用しているのであるが、一見して分かるように作業画面の表示はすべて漢語で表示されている。

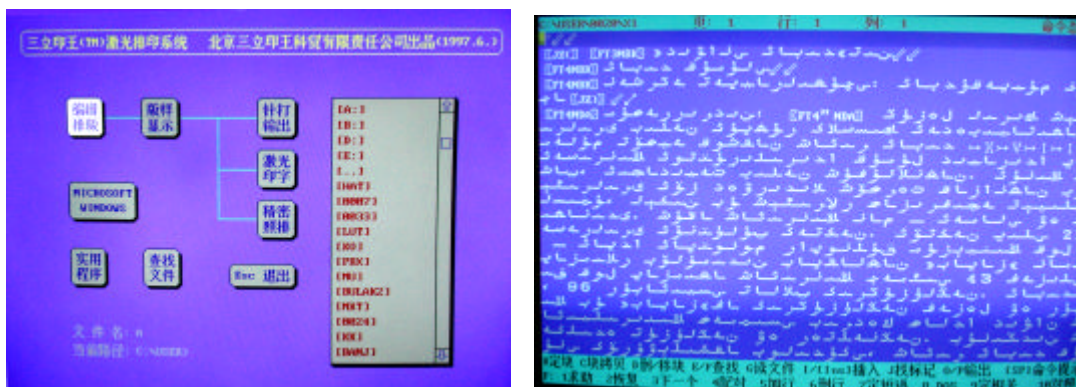


図3.2.3 「三立印王」の初期画面(左)と入力編集画面(右)。アラビア文字が何と left to right で表示されラテン文字でタグを入力する。

『三立印王』でのウイグル語の入力方式は"Uighur-Pinyin QWERTY"とでも形容すべきキー配列となっている。すなわちウイグル語の新文字（漢語のピンインに基づいて画定されたラテン文字）に相当するキーを押せばそれに対応するアラビア文字がでてくるようになっている。これは、このシステムで使用可能なアラビア文字使用言語（ウイグル語、カザフ語、キルギス語、アラビア語）全てに共通した入力方式である。このシステムではこれらアラビア文字のほかに漢語、日本語（ひらがな、カタカナ）、ロシア語など合計8種類の字母を使用することが出来るという。



図3.2.4 「三立印王」のウイグル語キー配列。ピンインのQWERTYに相当するアラビア文字が配置されている。

3.2.4. 問題点と課題

目下の課題は何と言っても書き手から出版・印刷までの流れを電子テキストを用いて速やかに行なえる環境を整えることであろう。現在の新疆の出版業界は活字製版からDTPへの移行を完了してはいるが、コンシューマ向けの電子テキストファイルとDTPシステムとの間に互換性が無い(!)ために、コンピュータの導入によって本来可能となるべきコストダウンや作業の迅速化が十分に進んでいない。またDTPシステムそのものの簡易化も考慮されるべきである。そして印刷技術との兼ね合いを考えるならば前述の通りMacintoshとの互換性も必要となってくるであろう。新疆におけるウイグル語出版・印刷の次の段階は以上の問題を消化して初めて可能になるように思われる。

コラム(3)新疆での日本語教科書出版

—新疆石油学院印刷廠訪問—

ウルムチ滞在中(8/19)に縁あって新疆石油学院の印刷所を訪問することが出来た。ここはもとと本科研の調査対象としては考えていなかったのであるが、ウルムチ到着後すぐに連絡をとったアルズグル・グリ女史(現立正大学外国人研究員、元 AA 研外国人フェロー)がここ数年手がけていた「ウイグル人学生のための日本語教科書」が何と現在「印刷中」と聞き、それにかこつけて急遽訪問することにした。「渡りに船」とはまさにこういうことを言うのだろう。

改革・開放進む新疆ではあるけれども、外国人が何かを見にくる、調べにくる、しかも写真などを撮ったりしている、というのは現地の人にはかなり気になることであるらしい。たとえ政治的には全然意味の無いことであっても、ひょっとしたら再び文化大革命が起こったときに(笑い話ではない。ある一定の年齢以上の人は結構そう考えているフシがある)外国人に「情報」をもらってしまったことが問題にされるかも知れぬ、と警戒するのである。どこから見ても問題にならぬ「お気楽な理由」でもない限り外国人は敬遠したほうが良い、というのが新疆人(特にウイグル人)の「常識」である。アルズグル女史の本の出版はそういう意味で格好の口実であった。



左より廠長、アルズグル女史、旦那様のメメト氏

アルズグル女史の紹介で廠長さんに挨拶。「飛び込みの風変わりな日本人観光客」として基本的なことを二三伺う。日本語教科書の組版にあたり、日本語とウイグル語はそれぞれどういう形で製版を行なったのか。ウイグル語は金属活字を使用したのか、それとも DTP か。この印刷廠は何種類の文字を扱えるのか、など。

まず日本語については、日本語の活字も日本語を出力できるコンピュータも無いことから、アルズグル女史が持ち込んだ原稿(Macintosh の環境下 Nisus Writer で入力し、紙に

出力した平成明朝体)を切り貼りしてそのまま使用している。頁数を節約し、見栄えをより美しくするためには5, 6ポイントの小さなフォントまで使用するのが理想的ではあったけれども、切り張りでは縮小すると文字がつぶれてしまうのでより大きな文字を使う以外に無かったそうである。たしかに、最近の新疆での出版物よりも文字が大きいせいか若干野暮ったい印象が無いでもない。

ウイグル語の部分については、アルズグル女史が Macintosh で作成したプリントアウト原稿(文字は林佳代子東京外国語大学助教授が既存アラビア文字フォントに基づいて作成したウイグル語フォント"urumchi"を使用)を見ながらアルバイトの学生が再び印刷廠のコンピュータに手で入力したものを使用している。日本語が切り貼りなのに対しこちらはちゃんとした電子テキストというわけである。この印刷廠は基本的にラテン文字、漢字とウイグル語の改造アラビア文字に対応しており、漢語とウイグル語、カザフ語、およびクルグズ語、英語などの言語を混在させた出版物を手がけることが可能なのだが、日本語はまだ難しい。

製本作業は印刷から上がった紙を甘肅省製の裁断機(AA 研コピーセンターの裁断機を10倍ぐらい大きくしたもの)で裁断した後手で2つ折にして綴じる「手作業」ですべて行なわれている。我々がAA 研のコピー室で日頃取り組んでいる作業と大差ない。それでいて最終的には立派な本になって書店の店頭で並べられるのであるから、流石はプロの製本・装丁技術と感心した次第である。



2000 年秋に出版されたアルズグル女史の著書『基礎日本語』

主なウイグル語ソフトウェア(1985-2000)

No.	発表時期	ソフトウェア名	制作単位	プログラマ
1	1985.12.	UHKC-(アラビア文字処理システム)	新疆大学	Hushur Islam, Wu Zungyaw
2	1989.1.	UHK-(アラビア文字処理システム)	アクス市師範学校	Ghayrat Tokhti
3	1990.2.	BDDOS-(北大方正多文字 DTPsystem)	北京大学	新疆民語委
4	1990.6.	XHPR-(ボグダ印刷システム)	北京 Shinkhān 公司	新疆民語委
5	1992.6.	WWHG-(華光多文字 DTPsystem)	北京華光電腦公司	新疆師範大学
6	1992.9.	OCR-(ウイグル語 OCR システム)	新疆廣播電台研究組	Jawjun
7	1993.1.	WWDG-(多文字 DTPsystem)	北京 Shinkhān 公司	
8	1993.6.	3L-(三立多文字 DTPsystem)	北京三立公司	
9	1993.11.	UDOS-(ウイグル語処理システム)	新疆大学 863 研究室	Dilshat Hewzulla
10	1994.1.	UVRS ウイグル語音声認識システム	新疆大学 863 研究室	Dilshat Hewzulla
11	1994.6.	ウイグル語音声合成システム	新疆大学 863 研究室	Dilshat Hewzulla
12	1994.7.	ウイグル語大文字(出力?)システム	新疆大学 863 研究室	Deng Shubing
13	1995.2.	ウイグル語ポケベルシステム	新疆大学 863 研究室	Dilshat Hewzulla
14	1996.1.	USTAR -(ウイグル語ワープロ)	未来軟件弁公室	Deng Shubing
15	1996.4.	Uighursoft CAPTION1.0(TV字幕システム)	新疆大学数学系 91(2)教室	Alim Ahat
16	1996.4.	Uwin3.1 (Win3.1 ウイグル語化 utility)	新疆大学 863 研究室	Turgun, Li Yongjun
17	1996.6.	ACDOS-多文字処理システム	新疆科学院	Gheni Abla
18	1996.11	UTDOS 6.2	未来軟件弁公室	Deng Shubing
19	1997.1.	UDICT	未来軟件弁公室	Deng Shubing
20	1997.1.	APQILAM-MS-DOS 翻訳ソフト	新疆科学院	Gheni Abla
21	1997.7.	Uighursoft CAPTION3.0(TV文字)	新疆大学数学系	Alim Ahat
22	1998.10.	Uighursoft AL KATIP 1.0 for Windows	Uighursoft	Alim Ahat
23	1999.2.	Uighursoft UTT1.0 タイプ練習ソフト	Uighursoft	Rahmanjan
24	1999.3.	ウイグル語穴 (? köznäk) システム	新疆大学 863 研究室	Ilham
25	1999.3.	Uighursoft PHOTOSHOP 5.0 学習ソフト	Uighursoft	Zaytungul
26	1999.4.	Uighursoft WINDOWS95 学習ソフト	Uighursoft	Zaytungul
27	1999.5.	Uighursoft MS-DOS 学習ソフト	Uighursoft	Yasinjan
28	1999.6.	Uighursoft AL KATIP 2.0 for Windows95	Uighursoft	Alim Ahat
29	1999.7.	Uighursoft AL KATIP 3.0 for Windows2000	Uighursoft	Alim Ahat
30	1999.10.	ALMAS TARJIMAN 1.0 翻訳システム	Almas Komputer Sharkati	Ilham
31	1999.11.	ALMAS WORD 2000	Almas Komputer Sharkati	Ilham
32	2000.1.	ウイグル語文字認識システム	新疆地理研究処	Khalmurat
33	2000.1.	Uighursoft AL TARJIMAN 1.0 翻訳システム	Uighursoft	Alim Ahat
34	2000.6.	Uighursoft AL KORRECTOR1.0 spellchecker	Uighursoft	Alim Ahat

("Uyghur yumshaq detallarning täräqqiyati"Komputer Dunyasi 1999.2. p.59-62 の付表を菅原純翻訳)

3.3.ウイグル語とコンピュータ

ここ 20 年のコンピュータ・テクノロジーの発展と普及とが世界の文字文化にもたらした多大な変化については今更言うまでも無いであろう。出版・印刷の分野では鉛活字を用いた印刷から DTP へとそのシステムが移行し、出版・印刷の工程、そして「出版」という言葉のもつ意味そのものに革命的な変化が起こった。個人レベルでも文字は紙への手書きからキーボードを利用した電子テキストへの「入力」が普及しつつある。そして、インターネットの普及は World Wide Web や e-mail を通じて文字文化に新しいかたちを提供しつつある。コンピュータは文字文化のあり方を劇的に変えつつあり、こうした動きは多少のタイム・ラグはあるものの新疆でも確実に進行している。以下、主としてソフトウェアとインターネットという 2 点について、ウイグル文字文化との関わりを念頭におきつつ眺めてみよう。

3.3.1. ウイグル語のソフトウェア事情： 基本ソフトとフォント

新疆におけるウイグル語ソフトウェア開発の大体の流れは別表(24 頁)に挙げた通りである。この表はウイグル語コンピュータ雑誌に 1999 年に掲載されたものであるが、表にあげたもののほかにも新疆では続々と新しいプロダクツが市場に登場している。それら個別のアプリケーションについては実際に試用する機会も無かったので本項では特にふれず、文字の表示にかかわる基本環境とフォントについてのみ紹介することとする。

3.3.1.1. 基本環境(Operating System とツール)

現在 Windows の環境では「ウイグル語版 Windows」というものは基本的に存在せず、中国語 Windows の付加機能という位置付けでウイグル語処理を可能にするツールの開発が行なわれている。今回の調査で訪れたウルムチでは「Uighur Windows」と銘打った商品²⁵を見かけたが、それはフォントと「入力ローカル」のセットのインストールを自動化しただけの代物で、ツールバーの表示などは中国語のままであった。現在の Windows のウイグル語環境がこのような形をとっているのは、開発技術の問題もさることながら、新疆が疑いなく中国のマーケットの一部であること、公的には中国語に従属する形でウイグル語が使用されている、という現状が強く反映されているものと考えられる。



ウイグル語化ソフトウェアのプロダクツを紹介する各コンピュータ会社のウェブ・サイト

左より akmassoft (<http://www.almassoft.com>), uighursoft(<http://www.uighursoft.com>), uqkun (<http://www.uighurspark.com.cn/>)

今後の方向性として注目されるのは Linux のウイグル語環境開発である。すでにウイグル人プログラマーの間ではいくつかのグループがその開発に着手しており、Uighur Linux開発のための情報交換サイトも開設されている²⁶。今回の調査ではその開発グループのひとつである新疆工学院・機械工程実験と計算力学研究所(ECMRC)を訪問し、また帰国後にそのセクションの責任者である新疆工学院教授メメティミン(Memetimin Gheni)氏のお話を伺う機会に恵まれた。氏によれば、2000 年 11 月の時点で Linux のウイグル語環境は依然完成をみていないものの、既

存のアラビア語 Linux を下敷きに近い将来の完成を目指している。その具体的な課題は(1)コンソールでのウイグル語字母の表示、(2)Left to Right 表記の言語(英語および中国語)と Left to Right 表記のウイグル語(および他のアラビア系文字使用言語)の混在の自動化、(3)ウイグル語の書く字母の接続に応じた変化(グリフ *glyphs* の適切な表示)の自動化、(4)英語(QWERTY)に準じたキー配列の実現、(5)ストレスのないテキスト入力/表示環境の実現、というように5つのポイントに絞られるのだという。中国では国営企業や政府機関が公式に Linux を導入する動きが活発であり、こうした全中国的な動きとあわせ、今後の開発・利用が注目されよう。



ウイグル語 Linux 開発サイト (<http://www.uyghurlinux.com>)

3.3.1.2. 海外で開発されたウイグル語環境

海外におけるウイグル語ソフトウェアに関しては、管見の及ぶ限りではこれまでに2つほど開発されている。

そのひとつは DTP の世界で名高い TeX のアラビア語バージョン (ArabTeX) である²⁷。Stuttgart 大学の Klaus Lagally 教授が開発した ArabTeX には ver.3.06 からシンディー語、マレー語と共にウイグル語のセットが実験的にではあるが組み込まれているという²⁸。ざっとマニュアルを眺めた範囲ではフォントの種類が限定され、kaf に3点を付す字母 ng の形がやや不恰好であり、またその処理操作には TeX に習熟する必要があるなど若干の問題はあるが、テキストの融通性という意味では現行の新疆の DTP よりははるかに実用的であろう。

もうひとつはわが国の一部研究者・ウイグル人留学生の間で使用されている Macintosh 用のフォント urumchi である²⁹。当フォントはわが国屈指の東洋学研究図書館である東洋文庫が、そのウイグル語蔵書目録を編むにあたって作成したもので、書体は1書体に限定されるものの NIsus Writer, Pascal Write 等のワープロソフトではストレス無く文書作成が可能となっている。ただ OS が Macintosh のみ対応であることと、所詮は既存のアラビア文字フォント (Baghdad) に下駄を履かせただけの代物である(文字コードがアラビア文字のそれと重複している)点など問題は多く、あくまで過渡的なものとしてとらえるべきであろう。

3.3.1.3. フォントと文字コード

次にフォントについて。2000 年秋の時点で私が調査した範囲では、中国語 Windows を下敷きとしたウイグル語化ツールは Almas Software, Bughra Sodtware, Uighursoft, Biligyar, Uqkun 等の会社がそれぞれ市場にリリースしており、各ツールにはそれぞれ10数書体の True Typeあるいは Open Type のフォントが用意されている。しかしながらこれらのフォントは各自ユニコード・フォントを謳ってはいるものの互換性が無く、ひとつのツールで作製したものは最後までそのツールの中でしか使用できない。これは各会社がそれぞれのコピーライト保護に固執して互換性を最初から排除しているという要素のほか、そもそもウイグル語のユニコード（ユニコードを用いたウイグル語各字母・グリフの配置規則）というものがはっきりした形で確定を見ていないという現状を反映している。



中国語 Windows98 ウイグル語化ツール“Biligyar”とフォント表示例

ユニコードの Ver.3.0 では Arabic の Extended Arabic Letters: 0671-06D3 や Arabic Presentation Forms-A の Glyphs for contextual forms of letters for Central Asian languages: FBD3-FBE9 などの領域に確かにウイグル語固有の字母がエントリーされており³⁰、ユニコードの文字セットを使用すればウイグル語の表示は可能である。しかしながら実際にはウイグル語はアラビア文字と根本的に異なる表記体系をもつため、ウイグル語では声門閉鎖記号として常用されるハムザの用法や、母音として使用される he のグリフの問題など、解決されるべき課題を多く残している。「既存のアラビア文字コードにウイグル語字母を付加するだけではウイグル語を処理することにはならない」と民語委のコンピュータ専門家ヤシン・イミン氏が正しく指摘するように³¹、これら諸問題を解決した共通の(公式の)ウイグル語（ユニ）コードの登場が待たれる。

3.3.2. インターネットとウイグル語

3.3.2.1. 新疆のインターネット環境

今回の調査で驚かされたのはインターネットが新疆でも私の予想を越えて広範に普及しているということであった。中国の場合、国営の中国電信(CHINA TELECOM)がプロバイダ業務を兼業しており、新疆でもカシュガルやホタンといった地区の中心都市であれば電信電話局にインターネット・カフェ(中国では網[口+巴]ネット・バーと呼ばれる)が併設されており、1時間に6元(70円前後)程度で端末を使用することが出来る。またダイヤル・アップ接続も全自治区共通の169あるいは163をダイヤルすればサーバーに接続することが可能である³²。このダイヤルアップはたとえばホタン地区チラ県のような砂漠の中の町でも市内電話で接続することが可能になっている。課金はアカウント取得手数料100元程度+従量課金であるといわれ、この金額は一般的な市民の収入からみれば決して安くはないが、同時に甚だ高いというわけでもない。新疆の人々にとってインターネットは我々が想像するほどに「高嶺の花」ではないようである。



ウルムチのインターネット・カフェ「169 新絲路ネット・バー」

3.3.2.2. 主要ウェブ・サイトの実情（サイトと文字）

こうした状況を反映して、ウイグル人のウェブ・サイトは今日数多く存在している。カシュガルから日々日本語のサイトを発信し更新を続けているウイグル人もいるほどである。それらのサイトは一般に漢語とアラビア文字ウイグル語（加えて最近ではラテン文字ウイグル語）を併用しているものが多いが、漢語がテキストなのに対しウイグル語は画像として表示されているケースが多い。一部のサイトでは各自が開発したウイグル語のテキストが表示可能となっている³³が一般的ではない。これは前述のように文字環境が依然として業界全体の一致をみていないという事情によるもののなかのだろう。

他方、注目すべきは e-mail やチャットといったコミュニケーションの中からウイグル語をラテン文字で表示する機運が生じてきている点である。現在ウイグル語のウェブ・ページの中には、ちょうど我々が利用する Yahoo! (<http://www.yahoo.co.jp>) や Infoseek(<http://www.infoseek.co.jp>)のように、検索エンジンに加えて BBS(掲示板)やチ

ヤット, フリーe-mail, ページャーといった様々なサービスを提供するポータル・サイトがいくつか存在している³⁴。これらのサイトではラテン文字表をトップ頁に示すことで(アラビア文字を表示できない)BBS やチャットで用いられるラテン文字表記の統一をはかろうとしているように見受けられる。

```
MISRAN:yaponluq Cayhanigha qedem texirip qildi,kopcilik qarxi alayli![10:55:21]
MISRAN:imran heyr dustlar!aman bulunglar![10:48:18]
10:47:52>> imran kulumsirigen halda Kopcilik ge: kim bar?
MISRAN:imran salam dustlar!kimning waqti bar?[10:46:13]
MISRAN:Eziz hox aman bolunglar!heyir.....[10:36:37]
MISRAN:Eziz Esslam doslar!!yahximu siler[10:24:51]
MISRAN:Fira heyr,Aman bolunglar![09:50:39]
MISRAN:Fira Essalamu Eleykum Dostlar!!![09:47:23]
09:27:06>> bulakb Kopcilik ge: ecep bek uhlaydighan heqkemimiz biz,hazirghice birersi
oyghinip koyay dimeydu
MISRAN:bulakb merhaba[08:50:13]
08:30:32>> bylakb Kopcilik ge: tehi oyghanmidinglarmu?
08:29:59>> bylakb Kopcilik ge: yahximu siler tordaxlar?
MISRAN:bylakb Cayhanigha qedem texirip qildi,kopcilik qarxi alayli![08:27:29]
MISRAN:bulakb merhaba[07:38:08]
MISRAN:memet Cayhanigha qedem texirip qildi,kopcilik qarxi alayli![04:31:36]
MISRAN:mamattjian Cayhanigha qedem texirip qildi,kopcilik qarxi alayli![01:45:35]
MISRAN:bilyaris Cayhanigha qedem texirip qildi,kopcilik qarxi alayli![01:30:38]
MISRAN:mamatjian Cayhanidiki dem elixini tugitip ciqip ketti.[01:11:56]
```

ウイグル語チャット(ラテン文字)の表示例。最初の行の Yaponluq は菅原(2001 年 4 月 10 日)。

3.3.2.3. ラテン文字使用への議論 (1) uighur-L

インターネットにおけるラテン文字使用の問題については、1998 年春に uighur-L (ウイグル・メーリング・リスト) で行なわれたディスカッションが注目される³⁵。この時の議論で焦点となったのは、主としてラテン文字の正書法を旧来のウイグル語「新文字」に準じた方式にするか、それとも現代トルコ語をベースにした「汎トルコ語方式」にするかという点であり、これは明らかに中国在移住者と在外居住者(ないしは亡命者)それぞれの政治的立場を反映したものであったと考えられる。議論は両者の間での綱引きのような状況を呈し、個々の発言は終始節度ある礼儀正しいものではあったが、まったくかみ合わぬまま程なく「沈黙化」した。この議論はウイグル語においてもラテン文字使用が時代の趨勢であるという共通認識の醸成には一定の役割を果たしたものと考えられるが、同時に新疆のかかえる政治問題がこのインターネットの正書法問題においても無視できぬ存在として深く横たわっていることをあらためて示したとも言える。

3.3.2.4. ラテン文字使用への議論(2) IUY の登場

最近の動向として特筆すべきは新たに「インターネット・ウイグル文字(IUY: Internet Uyghur Yeziqi) ³⁶」と呼ばれる新しいラテン文字正書法が登場してきたことであろう。IUYの文字は中国で開設されたあるBBSの議論の中で提唱され、今なおその利用をめぐって活発な議論が続いている³⁷。その文字スタイルは前述のウイグル語「新文字」と「汎トルコ語」のちょうど中間といった様相を呈し、むしろわが国や欧米の言語学や歴史学の世界で用いられている一般的なアラビア文字転写法に似通っているようにも見受けられる。インターネットでの便宜のためにウムラウトを表示しないことも可とし字母khとhを区別しないなど、表記として曖昧な部分があるものの、多くのウイグル語ウェブ・ページ、BBSで実際に使用されており、デファクト・スタンダードの座を獲得した観さえある。

ウイグル・メーリング・リストによれば、2000年12月1日に新疆大学で20余名の言語およびコンピュータ専門家を招集してインターネットでのラテン文字使用に関する会議が開催された。この会議では、(1)ウイグル語旧文字（アラビア系文字）がウイグル民族史を保持する上で不可欠であること。(2)目前の「技術的な」困難を「深刻に」捉えてはいけない。この「インターネットで用いられるラテン文字は」未来のウイグル文字の基礎となるべきものである。(3)ひとつの[ウイグル語旧文字の]字母に1つのラテン文字を対応させることを原則とすること。1字母に対し2字母を用いるのは避けられなければならない。(4)新しい字母は国際的な転写方式に準ずるべきである、といった4点が合意事項として採択されたという³⁸。前述の通り UIY がデファクト・スタンダードとして定着しつつある現状に鑑みるならば、将来あるいは UIY を雛型とした新しいラテン・ウイグル字母が公式に使用されるようになるかもしれない³⁹。今後の動向に注目したい。

Yengi Uyghur Elipbesi(Internet Sinaq Nushisi)					
HERP	OQULIXI	MISAL	HERP	OQULIXI	MISAL
Aa	ئا	Alim, Alma, Adem	Qq	ق	Qaraqax, Muqam, Iraq
Ee	ئە	Erkin, Erkinlik, Edeb	Kk	ك	Kepter, Emgek, Kelkün
Bb	ب	Bala, Bilim, Beliq	Gg	گ	Gül, Guma, Gödek
Pp	پ	Pul, Polat, Puqra	Ngng	كڭ	Yangaq, Xinjiang, Yengi
Tt	ت	Texna, Tömür, Tupraq	Ll	ل	Lacin, Leglek, Lampa
Jj (Zhzh)	ج	Jan, Jarangliq, Zhongguo	Mm	م	Murad, Meqset, Merhaba
Cc, (Chch)	چ	Capan, Cataq, Changchun	Nn	ن	Nan, Nadan, Namert
Hh	خ	Helq, Horaz, Huda	Hh	ھ	Hörlik, Hörmet, Hayat
Dd	د	Dada, Dangliq, Dewir	Oo	ئو	Oghaq, Ordun, Oruq
Rr	ر	Rawap, Rohluq, Rahman	Uu	ئۇ	Uyghur, Ustaz, Ulugh
Zz	ز	Zawut, Zörür, Zorluq	Öö, Oo	ئۆ	Ömür, Ödek, Öy
Zjzj	ژ	Zjornal, Gazj-guzj, Rezjissor	Üü, Uu	ئۈ	Üginix, Ümid, Üzüm
Ss	س	Sadiq, Sap, Süt	Ww (Vv)	ۋ	Weten, Wede, Veitnam
Xx (Shsh)	ش	Xcher, Xeytan, Shanghai	Ee	ې	Eyiq, Eghir, Eriq
Ghgh	غ	Uyghur, Ghalip, Gheyret	Ii	ى	Ittipaq, Ilghar, Ilgiri
Ff	ف	Fabrika, Afghanistan, Telefon	Yy	ي	Yangaq, Yalghan, Yar

Eskertix: Tirmaq icidiki herpler cet'el tilidin kirgen sozlerde ixtililidu. Ö, Ü larni kirgüzix imkaniyiti barlar ixletse bolidu.

IUY の字母表(<http://ardem.xiloo.com/yeziq/Elipbe.gif>)

コラム(4)紅旗路電腦商場訪問記

(1)ウルムチの「秋葉原」

2000年8月22日。烏魯木齊市の中心「大十字」にほど近い「紅旗路電腦商場」を訪問した。ここは烏魯木齊の秋葉原、とても形容したらよからうか。雑居ビルの2フロア弱の広大なスペースに数十の小さなコンピュータ用品を扱う店がひしめきあっている。このスタイルは香港のシャムスイボやモンコックのコンピュータ・ショップ、または秋葉原ラジヲデパートと共通していて、あるいはこういう店舗のスタイルがこの業界のグローバル（と言って悪ければ・ファクト）・スタンダードなのかもしれない。



紅旗路電腦商場

ここは秋葉原同様にコンピュータに関するものが何でも売られている。海賊版のソフトウェアも「流通」しており、こういうところも秋葉原的。価格は日本と同じか、やや安目といったところであろうか。聞いたところでは「フェイク」も多数出回っており、買い物には注意が必要とのことであった。確かにこの電腦商場内には外国のトップブランド（デル、コンパック、ヒューレット・パッカード等）のちゃんとした代理店もある一方で、昔ながらの烏魯木齊の雑貨を扱う屋台がそのまま品物をハイテク製品に変えただけのような怪しげな店もある。

今回この商場を訪問した目的は現代ウイグル語が目下どのようにコンピュータで使用されているか、その現状を把握することにあった。ここにはアルマス・ソフト言う会社があり、ウイグル語ソフトの開発・販売を行なっている。あらかじめメールでコンタクトを取っていたエルキン氏はあいにく不在であったが、社長のトゥルステン氏とホーム・ページ管理者のアブドゥレイム氏に会い、親しくお話を伺うことが出来た。

応対して下さったアブドゥレイム氏によれば、現在アルマス・ソフトが開発し、販売している「ウイグル語ウインドウズ2000」「ウインドウズ98」そして「オフィス2000」はそれぞれ40数種類のウイグル語オープンタイプ・フォントを備えている。またフリーのフォントとして almas.ttf をウェブ・ページで供給しているが、それらは全て「ユニコード・フォント」なのだという。

アブドゥレイム氏によれば、現在ウインドウズの環境で行な

える仕事はウイグル語でもすべて行なうことが出来るようになっていと言う。特にウインドウズ98～IE5 リリース後はマルチリンガル環境が整備されてきたため、日本語、中国語、ウイグル語、英語を同一の画面で処理することも可能になり、そうしたhtml文書も容易に構築が可能なのだから。そう言ってアブドレイム氏はMS-Wordで作成中のhtml文書を見せてくれた。たしかに、この方法であれば受け取る側にフォントがあれば表示は可能だろう。



紅旗路電腦商場内

(2)烏魯木齊のインターネット・カフェ事情

次に訪れたのは厳密には紅旗路電腦商場ではなく、東隣のビル（CHINA TELECOM）。その4階にあるのが「169新絲路網」（インターネット・カフェ）である。中国ではインターネット・カフェのことをワンバー（NET BAR）と言う。

料金は学生、教師は同一料金で1時間5元（90円程度）。事前にデポジットとして10元を支払い、端末を使用することができる。同時に注文した冷えていない（冷やしていない）コーラを飲みながら1時間ネットサーフィンを試してみた。アクセス・スピードは申し分ない。すくなくとも日本の大学の学生用端末よりは格段に速い。

このワンバーの利用者は利用料金が手ごろなのか、ウイグル人の中高生なども少なからず利用している。皆はどういうものを見ているのかと思い、私の端末の履歴を見てみたら意外にも（いや、ヤッパリというべきか）いわゆるアダルト・コンテンツが多数見受けられた。中国、特に新疆では国家の安定を脅かすような民族主義団体や人権擁護団体のホームページは一切アクセスできないようにコントロールされている。しかしアダルト・コンテンツは政治的には無害(?)なのかアクセス制限はかけられていないらしい。こんなことは端末レベルでも制限できるのに、何たること。

ここで、偶然にも新疆社会科学院中亜研究所の章瑩女史と再会した。聞けば今日はお嬢様の大学院進学のため、中国各地の大学の入試情報を検索しにいらしたのだという。女史は社会人8元という使用料に「なんて高い」と不満をあらわにしつつお嬢様とああでもないこうでもないと情報収集に取り組んでおられた。こういう光景を目の当たりにすると、中国も様変わりしたものだと感じないわけにはいかない。。

4. お わ り に

以上、新疆における20世紀以降の文字・出版・印刷文化の大体の流れと現在の状況についてごくごく限られた情報を示してみたわけであるが、私の能力不足や新疆という地域の特殊事情のために十全な成果を収められたとは言いがたい。以下、本報告書の不足点を明確にして今後の研究課題を提示しむすびにかえたい。

今世紀初頭まで続いていた伝統的文字文化史に関しては、墨や紙、本の装丁といった物質的な側面からの研究が今後必要であろう。今回の報告では偶々同時代のウイグル人が残した民族誌的記述から写本の材料を知ることが叶ったが、現在新疆、欧州各地に保管されている写本資料を形態的側面から調査することで実際の写本作成過程(工程)がより明らかとなり、それは伝統的文字文化像を解明する上で有意義な作業となることと思われる。

20世紀初頭から1980年代に至る出版事業については、何と言っても実際に手にとることの出来る印刷物が極めて限定されていた点が残念であった。1966年から10年間に亘って展開された文化大革命の影響もあり、今日まで残っている古い出版物はきわめて少数であり、残っているものにしてもアプローチが可能なものは極めて少ない。そのため本研究の目的のひとつであった各時代の活字の組み版の扱いについては結局まともな検討も出来ず、出版物の羅列に終始してしまった。また各時期にいかなる印刷機が用いられ、いかに活字がつくられたのか(あるいはどこから活字が持ち込まれたのか)という印刷技術史の問題に関しても有用な史料を発見することが出来なかった。これらの点については更なる資(史)料の収集と分析が必要である。

今日の印刷・出版事情、およびコンピュータ事情については日々変貌しつづけている分野ということもあり、2000年の限られた一時点におけるごく限られた範囲での見聞を出るものではないし、また専門外ということもあり報告内容の記述において不適切な部分がある可能性も否定できない。しかしウイグル語文字文化が今後デジタル化へむけて前進するために民語委の主導による規格整備が必要であることは火を見るより明らかであり、民語委の今後の動向は注目されよう。またインターネット・ウイグル文字(IUY)に象徴されるラテン字母が今後どのような形でウイグル文字文化の中に位置を占めることになるのか。キリル文字の転写とはいえ既に公式にラテン字母への転換を決定したウズベク語との関係はどうなっていくのか、チャガタイ語いらい途絶えて久しい共通中央アジア文字文化への可能性はあるのか、といった問題に関しても今後怠り無く注意を払う必要があるだろう。

註

- ¹ 「ウイグル」が新疆に居住する大多数のトルコ系イスラーム教徒定住民を指す名称として公式に使用されるようになるのは1995年のことであり、また言語学の世界では彼らの話す言語は厳密には古代ウイグル語と区別するため「新ウイグル語」あるいは「現代ウイグル語」と呼ばれることが多い。本稿では便宜のため過去に遡る形で「ウイグル語」「ウイグル人」の呼称を用いる。小松久男編『中央ユーラシア史』（東京：山川出版社，2000年）pp.376-7（濱田正美執筆）；『言語学大辞典』第2巻（東京：三省堂），282-283頁「新ウイグル語」の項（庄垣内正弘執筆）参照。
- ² 濱田正美「ウイグル歴史文献序説」『東方学報』355-356頁。
- ³ たとえばムッラー・ムーサーの『安寧史』の場合、カザンで出版された刊本から書写されたと思しき写本がルンド大学図書館（Lund University Library）のコレクションに現存している（Gunnar Jarring Collection, Prov.192）。この事実は当時その刊本が稀少であったことを示すものであろう。
- ⁴ Abdirehim Sabit (tuz.), 'Uyghur kilassik üdibiyati tarikh. 'ikkinchi kitap 2-qisim (Qashqar, 1982) pp.581-631.
- ⁵ 20世紀初頭カシュガルを中心とする地域で使用されていた紙がホタン紙、コーカンド紙そしてロシア紙の3種であったことについては"Putukuchining zurur lazimlik narsalari"参照。この記事(essay)を含む写本 *Collection of essays on life in Eastern Turkistan*. (Lund University Library, Prov.207)は20世紀初頭の当地の民族誌を当事者であるウイグル人が書き綴った貴重な資料である。
- ⁶ 『御製勸善要言』の木版ウイグル語テキストは現在フランス学士院図書館（Peliot Collection），ルンド大学（Jarring Collection, Lit.54）などに所蔵されている。
- ⁷ マフスート・アホンの製紙については Dr.Peter F. Tschudin (Riehen bei Basel), *Der letzte Papiermachen der Taklamakan*. (Basel: Basler Papiemühle, 1994. ISBN 3-905142-10-4)というパンフレット状の本でその製紙工程が写真で詳しく紹介されている（この本はマフスート氏本人が所有していた）。
- ⁸ 以下の部分の書誌情報は以下の文献の情報に基づく。陳世明『新疆現代翻訳史』（烏魯木齊：新疆大学出版社，1999年）272pp.; Mömin Säpiti, "'Üch wilayät 'inqilabi mähziligidiki 'akhbaratchiliq wä nashriyatchiliq' *Shinjang tarikh materiylaliri* 36 ('Ürümchi, 1994) pp.141-156.; Jarring, Gunnar, *Prints from Kashghar*. (Stockholm, 1991) 140pp.
- ⁹ 岡本雅享『中国の少数民族教育と言語政策』（東京：社会評論社，1999年）380-381頁。
- ¹⁰ Jarring, Gunnar, *op.cit.*, pp.29-116.
- ¹¹ *ibid.* pp.25-26.
- ¹² 岡本前掲書 386頁。
- ¹³ 無名氏「新疆人民出版社紹介」『新疆人民出版社40年記念画冊』（烏魯木齊：新疆人民出版社，1991年）5頁。
- ¹⁴ 鞏克「新疆人民出版社の初創時期」『新疆人民出版社40年記念画冊』28頁。
- ¹⁵ 無名氏前掲書。
- ¹⁶ 焦耐成「建社伊始蘇聯專家在我社工作二三事」『新疆人民出版社40年記念画冊』32頁。
- ¹⁷ Beller-Hann, Ildiko., "Script Changes in Xinjiang" Shirin Akiner(ed.), *Cultural Change and Continuity in Central Asia* (London & N.Y.: Kegan Paul International, 1991), p.73.
- ¹⁸ 岡本前掲書 399-400頁。
- ¹⁹ 同上
- ²⁰ 同資料は民語委の機関紙である『語言與翻譯』に1999年に掲載されたものと伺ったが具体的な刊号、頁数は不明である。
- ²¹ 民語委の会議室で実施したインタビューでは次の方々のご協力を賜った。巴理嘉（ボロタラ出身、モンゴル）、陳立華（アクス出身、漢）、塔依爾（クチャ出身、ウイグル）、努爾哈卒（フカン出身、カザフ）、加慶夫（チャブチャル出身、シボ）、垂森・伊明（クチャ出身、ウイグル）。
- ²² より具体的には現在ウイグル語の出版は13の出版社、69の政府出版部門、65の政府内部（＝刊行物非公開）出版部門、35の新聞社が行っており、毎年1300タイトルの書籍と500タイトルの月刊誌を出版しているという。Yasin Imin and Batur Musa, "The Utilization of Computers in Uighur Publishing" *ABD: Asian/Pacific Book Development*, 2001, vol.21, no.3 (Tokyo: Asia/Pacific Cultural centre for UNESCO) pp.8-9.
- ²³ 『新疆年鑑1999』（烏魯木齊：新疆年鑑社，1999年）322-323頁。『新疆年鑑2000』（2000年）327-328頁。
- ²⁴ 『新疆人民出版社40年記念画冊』17頁。
- ²⁵ 私が入手したのは Almassoft が開発した Uighur Windows2000(600 元)である。この「OS」は中国版 Windows2000 のベータ版とウイグル語フォント＋入力ローケルのセットを同梱したもので、まず Windows2000 をインストールした後マニュアルに従って同じ CD の中にあるそのセットをインストールするという手順を踏む。ちなみにこのソフトウェアには違法コピー防止用のドングルが付属しており、このドングルを接続していないとウイグル語の環境は使用できないようになっている。
- ²⁶ <http://www.ughurlinux.com>
- ²⁷ ダウンロードサイト：<http://ftp.informatik.uni-stuttgart.de/pub/arabtex/>
- ²⁸ 高階美行『TeX と ArabTeX の基礎知識』（<http://www.osaka-gaidai.ac.jp/~mes/multi/arabman.html>），p.56.
- ²⁹ ダウンロードサイト：<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/IAS/6-han/bs/font/urumchi.sit>
- ³⁰ Unicode Inc., *The Unicode Standard 3.0* <http://www.unicode.org/charts/PDF/U0600.pdf>,

<http://www.unicode.org/charts/PDF/UFB50.pdf>

³¹ Yasin Imin, "Uighur Text Processing on Computer" International Conference on Multilingual Text Processing, Waseda University, Tokyo, Japan. Dec.17-19, 1998.

³² 中国電信は国際的な ISP である GRIG と提携しているため、同じく GRIG と提携している@nifty の会員である私は自分のアカウントを用いて簡単にダイアルアップ接続できた。

³³ たとえば <http://www.ughursoft.com/Uighur/>, <http://www.ughurspark.com.cn/mainuighur.htm> などでは参照する側がフォントをダウンロードするなど環境を整えればウイグル語テキストが表示できる。

³⁴ 主なものとしては Taklimakan (<http://www.makanim.com/>), Uighur Online

(<http://www.ughuronline.com/uyghurce/uyghurceindex.htm>), misiran (<http://www.misiran.com/>) などがある。

³⁵ http://www.taklamakan.org/uighur-l/archive/1998/5_2_1.html

³⁶ <http://ardem.xiloo.com/yeziq/yeziq1.htm>

³⁷ <http://www.misiran.com/cgi-bin/bbs/bbs.cgi>

³⁸ <http://www.mail-archive.com/uighur-l%40taklamakan.org/msg01219.html>

³⁹ この会議には UIY の提唱者であるムハンマド・エルデム Muhemmed Erdem (新疆ウイグル自治区教育委員会) も出席者に名を連ねており、この事実は少なくとも UIY が「将来のウイグル文字」の候補のひとつである可能性を否定するものではないであろう。